くらし百科 NO.8

私たちの消費行動は社会を変える

京都生活協同組合副理事長
渡辺　明子

お買い物は楽しいものです。そして、しっかりと品定めをすることも大事なことです。買い物とは「消費をしている」ということですが、普段は余りそう意識せずに過ごしているように思えます。「消費」という言葉を辞典で調べると、「使ってなくすこと」「品物を生産しないで食べたり使ったりすること」となっています。消費者はというと、支払いの対価として物やサービスを受け取るだけの責任がない存在のようですが、消費には経済を活性化させるという大事な役割もあり、私たちの消費行動のありようが社会をよくも悪くもするのは確かなようです。

ある新聞に、大学生による「変形野菜を仕入れ販売し、廃棄を減らす」活動が紹介されていました。幼いころに祖父母が変形野菜を破棄するのを見て感じた「栄養も味も変わらないのにもったいない」という、一人の学生の方の問題意識が、発案のきっかけだと書いてありました。未来を担う若者が「もったいない」との意識を地域の中で行動に移したことに感心しつつ、私たち消費者の多くが日常的に商品の生産現場や現在の物流のありよう、そして最終の廃棄までをより意識した消費行動をとることができれば、社会を少し変化させることができると思いました。消費に対する考え方の変化が暮らしの豊かさの意味を変化させることになりそうです。

例えば、並んだ牛乳などの商品を、日付が新しい後ろの物からではなく前から取ることが、ごみを減らすことにつながります。わずか1～2日の違いで手に取られなかった商品は廃棄物となり、その一部は飼料などへ再利用されますが、全国的に見るとやはり巨大なごみとなっていくからです。また、環境面だけでなく、地球のどこかで約10億の人々が飢餓と貧困に苦しんでいるということを意識することも忘れずにいたいものです。

個人の消費と少し異なることですが、公園などでの木材使用が減ってきたことが気になっていました。確かにプラスチックなどは丈夫ですし、人による手入れが不要です。しかし、森の木々を暮らしの中で使うことで、山に人の手が入って新しい木々が育ち、森が活性化していくという自然な再生循環が行われます。森が元気だと海も元気になります。木材の活用が、自然環境を守ることにつながっていきます。そして、自然のものは「朽ち果て、再生する」ということを子どもたちが身近な経験を通して知ることが、大人になっていく上で大切なのではないかと思っています。

古くから「暮らし」をとても大切にしてきた京都の町が好きです。人々が自然との調和を考えた賢い暮らしをしてきたことを、心にとどめ、今後10年20年後をしっかり見据えた消費行動をとっていきたいですね。